

報告タイトル

「中小企業の早期国際化の実現と持続的競争優位の構築」

氏名 山口 友規 所属 関西学院大学大学院 商学研究科

キーワード（5つ程度）：ボーン・グローバル、早期国際化、イベント・ヒストリー分析

要約（Abstract）

1. 研究目的（Objective or purpose）

ボーン・グローバルや国際ニューベンチャーなどの早期に国際化する企業の研究のトレンドは1990年代前半から2010年代前半までにあり、約30年間で、多くの研究が蓄積されてきた。その多くは、国際化プロセスや海外市場参入方式の選択など、国際化それ自体や前段階に着目している。また、伝統的な国際化の理論がボーン・グローバル現象の説明に適用できるかという理論的検討は十分に進められたものの、日本の中小企業の縦断的なデータを使用した早期国際化に関する実証研究は少ない。そこで、本研究は、早期国際化が中小企業のその後の成長や生存に対して、重要な役割を果たしているかを実証することを目的とする。

2. リサーチ・クエスチョン（Research question）

本研究は「早期の国際化が企業のその後の成長・生存を決定する上で、重要な役割を果たすか。」という問いに答えることを目指す。

3. 研究デザインと方法論（Research design/methodology）

データ収集：国内の2010年から2020年に創業した中小企業を分析対象とする。海外企業進出総覧や日経 NEEDS などの二次データを用いて、企業の創業年や国際化までにかかった期間、海外売上高比率等のデータを収集する。

分析手法：イベント・ヒストリー分析という手法を用いて、中小企業の生存・成長に早期国際化がいかに関与しているかを特定する。具体的には、従属変数に企業が生存したかどうかを、独立変数には国際化のタイミング（早期国際化企業か否か）を含むその他生存に影響を与える可能性のある要因を設定する。

4. 発見事項 (Findings)

早期国際化する企業は、設立当初に限られた経営資源を活用して、海外市場に参入する。このような国際的な起業家精神を備えた企業は、その後も有力なケイパビリティや経営資源を蓄積して、生存し、成長することが予想される。若い企業が海外市場にさらされたときに生じる不確実性やリスクが、新たな機会や資源の探索・開拓のきっかけとなるため、早期国際化は若い企業の新たな能力開発における重要な触媒となると主張している先行研究と矛盾しない。

5. 理論的・経営管理上のインプリケーション (Theoretical/managerial implications)

本研究は、早期国際化が企業の持続的競争優位を構築する要因となることを示唆する。この関係性を縦断的なデータを使用して実証することで、理論的・経営管理上のインプリケーションを示す。

6. 限界 (limitations)

対象を国内中小企業としている点に限界がある。本研究は、早期国際化企業の実証研究を始める足がかりとして、国内の中小企業を対象として扱う。しかし、本来、国境を意識しないグローバルな起業家精神を持つ早期国際化企業の研究には、より精緻な対象の選定が必要となる。

7. 独自性と価値 (Originality/value)

早期国際化企業の国際化プロセスや出現要因を探求した研究は数多く蓄積されている。一方で、その後の成長や存続に焦点を当てて実証分析を行う研究は、国内では少ない。また、本研究で採用した分析手法にも独自性がある。イベント・ヒストリー分析を用いることによって、時系列的な要素を含むデータをより理想的な形で分析している。